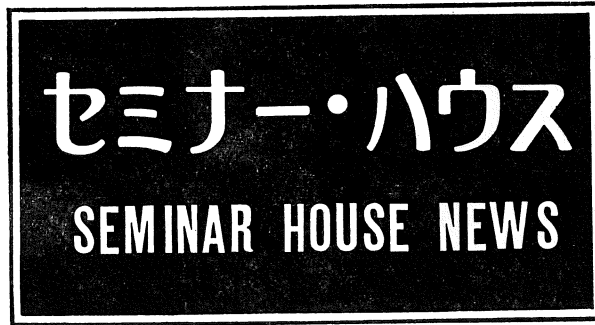


第38号 35円

昭和50年 5月25日

内容

- 『大学を開く』の刊行を祝う 1
- 開館十周年の幕開き 2
- 開館十周年記念事業の募金開始 3
- 千人会の新会員を募る 4~5
- 第29回理事会・第18回評議員会 6
- 新たに二つの施設が加わる 6
- 第11回大学教員懇談会 7
- 第74・75回大学共同セミナー 8
- 業務通信 (I, II) 9, 10
- 利用状況 10



発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木
 (☎ 192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590 番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241) 3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

創立十年史

『大学を開く』の刊行を祝う

『大学を開く』をみて

茅 誠司



大学セミナー・ハウス館長飯田宗一郎さんがある時私の事務所に大変美味いお菓子を持ってやってきて、セミナー・ハウス十周年記念事業の一つとして『大学を開く』という本を作るのでその題字を書けという注文をされた。飯田さんは人も知る熱意と創意とを以ってセミナー・ハウスを建設された方だが、あまり人に知られていない妙な趣味が三つある。一つは下駄で、下町の下駄屋で今時なかなか手に入らないような桐の柁目の下駄を作らせて持ってきて下さり、私は今も茅ヶ崎の家の庭でそれを愛用している。次は洋傘で、これも下町の特殊な専門店で特別なものを作らせて贈られた事がある。

最後の三番目は和菓子である。店の名前は知らないが理事会に出席すると帰りにお土産にそれを持たされる。その味は特に吟味して

あってそこら普通の菓子店のものとは異質のものである。ところでこの「大学を開く」という題字を書けという注文のあった時は、菓子のほかに多摩地区で珍らしい野草「たまあおい」の鉢を持ってきて下さった。この珍草は昨年の冬をどうやら無事に越して今年も光沢のある葉を拡げて私を安堵させてくれている。普通なら悪筆の私が題字など書く訳はないのだがこの菓子と野草の奇襲に遇ってとうとう陥落してしまい、その結果があの題字となった次第である。可笑しいことに、書いた直筆をみる」ととも駄目だと思ったのに印刷してみると、その悪いところが消えてしまっている。目下幾分はつとしているところである。

さてこの本が出来上つてきたのを手にしてみても、セミナー・ハウスが現在に到るまでの紆余曲折した道程がいかに長かったことか、そしてそれがまた実に克明に記録されているのを知って今更ながら感慨の深いものがあつた。特に私共と今は幽明境を異にしておられる佐藤喜一郎さんが、この仕事の有意義な点を早くから認められ、最後まで並々な力ぬを注いで下さった記録が心に染み入った。上代たの、大浜信泉の両氏も最初から

今日まであらゆる努力を惜しまず飯田さんを励ましてこのセミナー・ハウスの完成に力を尽された。この本をみて思うことは、このセミナー・ハウスがいま日本の大学のために尽している大きな功績もさることながら、一人の男の熱情と、それを纏る多くの人々の協力の歴史こそは不滅のものとして残るに違いない。

しかしセミナー・ハウス創設の時代は終わった。これからは今迄のような特別な人達に待たないでも淡々とした流れのような円滑な運

「大学を開く」典型、セミナー・ハウス

和歌森太郎



大学セミナー・ハウス創立十年史が編まれるとは、かねがね伺っていたが、小冊子かなと思つて、ところががりつばな大冊で、周到に資料を整理編成した書に結実したことに驚嘆しつつ、ハウスの産みの親、飯田さんのこの面での才腕にも、深い敬意をおぼえた。

このセミナー・ハウスの構想が飯田さんの胸中に湧きだしてから、文字どおり骨身惜しまず奔走し続けた経緯、大学人、財界の指導的立場にあつた人たちの共鳴協

営を期待すべきではなからうか。これは劇しい社会変動の中にあつては容易に実現できないことのように思われる。しかし、飯田さんが私共に対してこのセミナー・ハウスの構想を明らかにされた時、誠によい構想ではあるがその実現は容易なことではないと思つたのが、今日では美事に実を結んでいふことを思えば、その実現に向つて一歩を踏み出すことにちゅうちょ逡巡すべきではなからう。私はそのような運営が実現する日を強く期待している。(初代館長)

力を得て、着実に基礎固めを果たしたまでの辛苦と感激との交錯の十年史。それが本書だが、ちょうど大学紛争が各所に起り、また深刻化していったかわらで、大学の在るべき姿としての学問を介する教授・学生間の人間的交流、学際的テーマを掲げて、しかもインター・ユニヴァーシティで研修する意義は絶大なものがあつたことを、あらためて痛感させる。

大学は開かれねばならぬ、というとき直ちに大学の社会的開放が問われる。しかし先ず、このセミナーで実現されている意味での開き方が、各地方でできていく要があると思う。この点で、この歴史の書が「大学を開く」とあるのは、まことにいみじき妙言を題したものだと思ふ。(東京教育大学教授)

◆開館十周年の幕開き

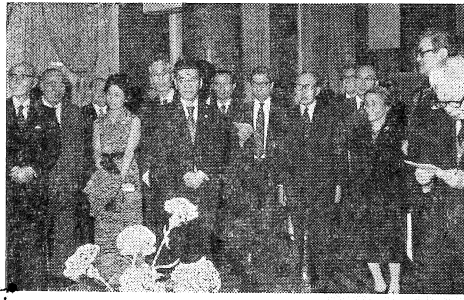
大書と関く出版と

永井文部大臣の就任を祝う会

昭和50年3月17日・丸の内日本工業倶楽部

東京事務所を編集室として、一年半がかりで編集をすすめていたが、昭和49年12月末をもって完了し、ついに刊行の運びとなった。内容は法人創立十年、開館七年の歴史を主体としているから、昭和47年11月18日に行った創立十周年・開館七周年記念式典を終点としているが、昭和49年6月現在までの資料が加わっている。しかも実際の刊行が昭和50年になったので、文字どおり、開館十周年の記念出版となった。幸運にめぐり合っ

て「大学を開く」は世に出ることになった。さらに好事は重なった。セミナー・ハウスの風光が実現されたとしても不思議はない。プログラムは、創立当初から関係の深い東京女子大学白井常教授の名司会によって進められ、まず正田理事長の開会挨拶、元理事長大浜信泉氏の音頭で乾杯を行い、祝宴に移った。



永井文部大臣ご夫妻を中にして

ひとしきり会食と歓談にたのしい時を過ごした後、東京女子大学教授池宮英才氏のピアノ伴奏で同大卒業生下河辺美知子さんのソプラノ独唱があり、スピーチの第一番は初代館長茅誠司氏で、ハウス

側を代表して記念史刊行の意義と若い永井文部大臣の就任を友情こめて祝い、かつ激励された。次いで東レ名誉会長田代茂樹氏、三笠宮崇仁殿下、J・L・スチュアー

辞で述べられたおほめの言葉を、日常業務に従事している職員にも分けさせていただきたい、という承認を求め、また、十年の歩みの中でそれぞれの時、それぞれの所で協力をお願いいただき、かわり合っていた方々に報いるため、その由来を明らかにし、その一つ一つを記録してお手元にお贈りした次第であるということ、そして明日の大学セミナー・ハウスの歩み々々と共に続けていきたいと挨拶した。

「おもな来賓」(敬称略) 三笠宮崇仁殿下、永井文部大臣、同夫人、森戸辰男、大浜信泉、同夫人、茅誠司、同夫人、上代たの、田代茂樹、山内恭彦、手塚富雄、加藤一郎、永井雄三郎、小川芳男、ジェームス・スチュアー

これに対して永井文相から謝辞が述べられた。第一回大学共同セミナーの運営委員長をつとめられた当時の思い出から話をときおこされ、大臣就任は「能力の問題ではなく覚悟の問題」であったという所感や、無党派大臣としての数ヵ月の印象などを語られた。飯田館長は、ここにお集まりの方々

ト、谷川徹三、小谷正雄、天城勲、安藤良雄、団勝磨、藤田信勝、藤富保男、芳賀 徹、池宮英才、井深大、今井淳、板垣与一、神保信一、加藤六美、川田侃、川原栄峰、金井信一郎、勝木保次、笠木三郎、木田宏、黒羽亮一、慶伊富長、児玉久雄、小池勇一郎、近藤正夫、村井資長、升本喜兵衛、三宅彰、前田護郎、三上次男、村山松雄、武者小路公秀、守永誠治、箕輪成男、中村哲、内藤正、中島文雄、長松昭男、根岸愛子、中嶋嶺雄、大山信郎、大野泰雄、大石修而、相馬勝夫、白井常、鈴木皇

散会に当たって飯田館長は、祝

アジア財団日本代表 J・L・スチュアー

- 朱牟田夏雄、染谷恭次郎、板倉孝一、坂本義和、田中未来、玉真秀雄、田島恵児、谷口修、高橋源次、都留春夫、竹内喜夫、同夫人、高松松吉、山内俊吉、吉田裕、吉阪隆正、田中弥寿雄、安嶋弥、沼田稻次郎、黒田颯、宇梶洋司、伊藤良二、松村康平、成瀬治、松崎義徳
- 開会 18時
- 東京女子大学教授 白井 常
- 挨拶 理事長 正田建次郎
- 乾杯 大浜 信泉
- 会食 独唱
- 東京女子大卒業生 下河辺美知子
- 「ケルビーノのアリア」 「早春賦」 「さくらさくら」
- 伴奏 東京女子大学教授 池宮 英才
- 祝辞 初代館長 茅 誠司
- 東レ名誉会長 田代 茂樹
- 三笠宮崇仁殿下
- 永井文部大臣に贈る歌 国立音楽大学イリス合唱団
- 指揮 佐藤 公孝
- 「栄光あれ」 作曲 F. シルシャー 作詩 岡本 敬明
- 謝辞 文部大臣 永井 道雄
- 合唱 「大学セミナー・ハウス讃歌」
- 閉会挨拶 館長 飯田宗一郎
- 散会 20時

祝 辞

三笠宮崇仁殿下

私のことを申し上げて恐縮ですが、私が東京女子大学に就職しましたのが昭和30年でありまして、今年で二十年目になります。当時飯田さんが事務長をしておられました。

そして大学セミナー・ハウスのお仕事を始められてから、私は学会で泊めていただいたり、度々伺って親しくその実情を拜見しまして、この十年間にまったく無から有を生じ、その有が立派に花開いた有様に接し、ただただ驚嘆しているわけでございます。もちろん陰には、ここにお集まりの皆さま

はじめ、たえずハウスを使っておられる各大学の教師、学生の協力があるわけですけれど、飯田さんのリーダーシップがなかったら、とてもこのような発展はなかったらと思うまして、十周年に当たって心からお祝いのご挨拶を申し上げます。

田代 茂樹(東レ名誉会長)

私は佐藤喜一郎氏とは長い間兄弟のようにして暮らしておったのでそのお蔭を持ちまして大学セミナー・ハウスに関係を持つことになったのです。飯田さんは、ICUにおられた当時卒業生を使ってくれないかということでお見えになってお目にかかったことがありましたが、その後、佐藤君からこういう人が見えたから君も協力しろ

ということから関係が始まったのです。多くの方々のご協力があったからでもありませんが、その後も飯田さんの熱意、熱情にはほとほと感じ入った次第であります。佐藤氏は、セミナー・ハウスの設立後も引き続きこの仕事に打ち込んでおられて、今日、元気でここにきて見えたなら、さぞかし涙を流して喜ぶのではないかと、私は今も考えた次第です。私は新入生歓迎セミナーの折りに伺って、六〇名ほどの男女学生の話をしているかをざっくばらんにお話したことがあります。あとからいろいろな質問が出て討論をやったわけですが、非常に楽しい午後を過ごしましたことを思い出しております。

J・L・スチュアート

(アジア財団日本代表)

この十年間に、確かに方々でセミナー・ハウス以上に立派な設備を持ったホテルや学生会館などの施設ができたことでありまして、しかし、いろいろな若者の要求を考えると、次の十年においても大学セミナー・ハウスの役割は落ちるどころか、一層重要性を増すだろうと私は思います。これは、セミナー・ハウスが精神面の働きを有しているからではないでしょうか。

私のイメージのセミナー・ハウスは、人間は平等であるということとです。いろいろな時に経験したことです。いろいろな時に経験したことです。いろいろな時に経験したことです。いろいろな時に経験したことです。

開館十周年記念事業のため二億円募金運動を開始

開館して十年、この機会に新たな教育分野を開拓することになった。従来の施設は学部学生を対象とした教育活動のために建てられたものである。近年利用される人の間から二つの要望が出ています。大学院生や研究者用のセミナー室が欲しいといわれるのが一つ、他は国際交流の場が欲しいというものである。

別記のごとく大学院セミナー館は実現して、本年五月に使用できるが、これもセミナー室だけであ

って、宿舍が付属していない点。今後の宿題として残っている。

つきは国際交流オリエンテーション・センターという外国人用の宿舎とセミナー室と事務室とがついている建物の新築計画である。これには日本滞在が二ヵ月、一ヵ月に及ぶことを考えて、簡単なスポーツができる体育館を付設することにしていく。(単位二万円)

●建築工事概算 二五、〇〇〇

(内訳)

大学院セミナー館 五、〇〇〇

国際交流オリエンテーションセンター 一三、五〇〇
体育館 六、五〇〇

●資金計画

募金(指定寄付金) 一〇、〇〇〇
文部省補助金 一、三〇〇
その他の協会補助金 三、七〇〇

なお二億円募金については、昭和50年2月17日官報で大蔵省告示第七号をもって、指定寄付金取扱の許可がおりていて、指定期間は昭和50年2月1日より一年間。

しかしこの不況下必ずしもこの募金が一年で達成できるとは思われませんが、大学院セミナー館分として文部省補助金一、三〇〇万円は

お見えになると、もちろんわれわれは偉い方々として尊敬いたしますが、セミナー室や食堂に入れば、皆同じだという気がはつきり出たと思うことでもあります。つまり先生と学生の違いがなくなりました。またエリート大学と他の大学の学生の関係も対等です。そして日本の学生と東南アジア、アメリカ、オーストラリアの学生との関係を見ても、まったく平等に活動することができてくるのが、この大学セミナー・ハウスの一番の役割ではないかと思えます。

またこの精神は、もともと永井先生が持たれたことと思えます。今度大臣になられて Tanaka Densetsu がますます上がることと思ひまして、今後のご活躍に非常に期待をもつ次第です。

なお三井銀行会長小山五郎氏と野村證券会長瀬川美能留氏が常任委員に就任されることも年内に内諾を得ることができた。経団連の協力を仰ぎ、今秋から業界団体、有力企業を対象に寄付金行脚が始まることになる。

個人の寄付が以上の計画の中に参加してくれることを切に望んでいる。また松下館や図書館が松下電器産業や三井銀行の単独寄付で実現したように、前記の施設が記念寄付によって日本の大学と国際交流活動に提供されるならば大学院セミナー・ハウスの事業は一段と重みを加えるであろう。

年の歩み

11月発足——
募ります——

年度	会員数	A	B	C	終身
42	230	60	71	99	2
43	383(4)	73(2)	110	198(2)	2
44	489(5)	86(2)	136(1)	265(2)	2
45	540(10)	92(2)	149(3)	296(5)	3
46	600(12)	94(2)	166(3)	336(7)	4
47	746(13)	107(2)	207(3)	428(8)	4
48	851(17)	116(3)	234(4)	497(10)	4
49	961(23)	128(4)	267(6)	561(13)	5
50	971(24)	127(5)	268(6)	570(13)	6

()内は物故者を示す

【年度別にみた会員数】

I 会員の現況 (4月30日現在)
 大学関係者 七六四人
 官庁・会社・社会人 二〇七人
 計 九七一人
 (うち物故者二四一人)
 実人員 九四七人

- ▼吉野山にさくらが千本
- ▼多摩の丘に善意の連帯千人
- ▼こうして歴史は名所をつくる
- ▼年長会員に敬意を表し
- ▼中年・壮年層の参加を望む

II 広い階層にわたる連帯
 (大学別人数)
 東京95、早稲田43、青山学院30、
 慶応義塾28、中央26、日本女子25、
 明治25、東京都立25、日本24、東
 京工業22、立教21、上智20、専修
 20、東京学芸19、成蹊17、明治学
 院16、東京教育16、一橋16、法政

千人会にいつも入りたいと思
 いながら、大変おそくなり申し
 訳ございません。三月の朝日新
 聞の記事で、すでに九百名を越
 えた由、千名になる前にと、遅
 ればせながら申込みさせていた
 だきます。
 四月二日 旅行先の熊本にて
 東京工業大学助教授
 松山正男

終身会員に参加して
 いつもお世話になり感謝して
 おります。私も来る四月二五日
 で満六八歳。年会費では何回納
 められるかわかりませんので、
 このあたりで感謝の意を表させ
 ていただくことにしました。
 うつそみのいのち一途に
 生き生きて老ゆれど
 消えず裡なる炎は
 法政大学教授 安井 郁
 一九七五年二月二十八日

終身会員 六人
 A会員 (年額一万円) 一二七人
 B会員 (年額五千元) 二六八人
 C会員 (年額三千元) 五七〇人

III 千人力を発揮して法人の危機
 を救う
 《その1》昭和49年9月1日の台
 風16号で本館広場南側の斜面が崩
 れ落ち、大きな被害をうけた。経

15、東京女子14、東京理科9、聯
 浜国立9、武蔵工業8、学習院
 8、ICU8、東洋8、お茶の水
 女子8、東京医歯7、東京農工
 7、電気通信7、津田塾7、立正
 7、東京経済5、玉川5、武蔵
 5、神奈川5。
 4人II順天堂、共立女子、創価、
 千葉、京都。3人II工学院、独協、
 帝京、横浜国立。2人II近畿、九
 州、広島、筑波、東北、芝浦工業
 東京芸術、成城、亜細亜。1人II
 聖心女子、フェリス学院、実践
 女子、拓殖、東京水産、帝塚山学
 院、千葉工業、国立音楽、麗沢、
 鶴見女子、二松学舎、東海、北海
 道、聖マリアナ医科、杉野女子
 大阪、高崎経済、関東学院、日本
 工業、立命館、東京神学、北海道
 工業、新潟、桜美林、相模工業、大
 阪市立、東邦、大東文化(計82校)。
 《短期大学》 3人II白梅学園、文
 京女子。2人II都立商科、目白学
 園、立教女学院、都立短期。1人
 II都立工科、共立女子、沖繩キリ
 スト教、十文字学園、東京成徳、
 カリタス女子、日本女子(計13校)。
 《その他》 文部省6、銀行・会社
 58、医師9、開館以後の卒業生46、
 地方公務員4、教育文化団体18、
 公認会計士13、家庭の主婦13、現
 旧職員18、その他(自営)14。

IV これからの千人会費は教育と
 広報活動の援助に
 ①教育活動費(50年度予算概算)
 (収入予算) (千円)
 大学共同セミナー参加費 三、八〇〇
 ②広報活動費
 セミナー・ハウスニュース編集
 発行費 一、〇〇〇
 50年度千人会費収入見込 四、〇〇〇

常費でこのような不時の出費を捻
 出す余裕がないとき、千人会の
 三年間の繰越金をもって災害復修
 工事を行うことができた。
 災害復修工事総額 一、二七〇万円
 千人会の援助額 一、〇五〇万円
 《その2》創立十年史『大学を
 開く』の出版費は当初二〇〇万円
 と見積り、二年がかりで経常費を
 積立てて来たが、値上げがあり三
 〇〇万円となった。増額分一〇〇
 万円を昭和49年度千人会費から援
 助をうけた。



米寿の斎藤勇先生を
 お訪ねして(2月3日)

感謝してご清福を祈ります
 長老会員(入会七年以上)ご紹介
 (年齢順、敬称・肩書略)
 [昭和42年度入会]
 久松潜一、佐原六郎、内ヶ崎賢五
 郎、升本喜兵衛、岡本定次、中川
 章、正田卓治、春日井薫、佐藤直
 子、山内恭彦、柴田恭二、沖中重
 雄、茅伊登子、五唐 勝、二宮永
 蔵、磯村英一、高松松吉、玉真秀

[昭和43年度入会]
 上代たの、斎藤 勇、北沢佐雄、
 玉川直重、植村甲午郎、久保田喜
 久子、芝川栄三、影森 明、山田
 良之助、大原恭子、野見山不二、
 山本芳夫、田中外次、岩井 肇
 太田敬三、手塚富雄、久武雅夫、
 柳原繁雄、石田竜次郎、植田捷雄、
 石井千尋、高島善哉、武藤富男、
 高村象平、松本樺太、茂木誠陸

[昭和44年度入会]
 山内二郎、高橋源次、尾崎 茂、
 岡田正弘、松元三郎、堀 信一、
 田中久兵衛

国際学生セミナー参加費 三〇〇
 教員懇談会参加費 四〇〇
 文部省補助金 五、〇〇〇
 千人会援助金 一、五〇〇
 計 一一、〇〇〇 (千円)
 [支出予算]
 講師謝礼 一、三〇〇
 講師宿泊費 一、〇〇〇
 参加者宿泊費 五、二〇〇
 印刷費 二、七〇〇
 通信費 五五〇
 委員会諸費 二五〇
 計 一一、〇〇〇 (千円)

八人会千

—昭和41年— —新会員—

◆現在会員は九七一名です

大学人 七六四名
社会人 二〇七名

(50年4月末現在)

◆新しく会員となられた方々

(第27回報告(申込順))

- B 中央大学教授 竹村 猛殿
- C 大阪市立大学助教授 古賀正則殿
- B 東邦大学教授 吉田光孝殿
- C 東京外国語大学教授 田中忠治殿
- C 中央協同組合学園嘱託 野中虎雄殿
- C 芝浦工業大学教授 十代田知三殿
- C 東京経済大教授 春田素夫殿
- B 東京女子大教授 福田一郎殿
- C 立教大学教授 高橋昭三殿
- C 東京都立大教授 大羽 滋殿
- C 立正大学助教授 高松正昭殿
- B 東京教育大教授 中野 卓殿
- C 中央大学教授 宮野兼吉殿
- B 東京工業大学助教授 松山正男殿
- C 青山学院大教授 坂井正広殿
- C 東京女子大教授 高村新一殿
- C 広島大学教育研究センター 助手 馬越 徹殿
- C 東京外国語大学助教授 河島英昭殿
- C 電気通信大教授 芳野越夫殿
- C 日本女子大学助教授 小島蓉子殿
- C 東京農工大学教授 金子六郎殿

- B 東京外国語大学助教授 中川文雄殿
- B 東京農工大教授 川名 明殿
- C お茶の水女子大学助教授 小川洋輔殿
- 終身会員 沖繩国際海洋博覧会 協会職員 桑山真知子殿
- C 明治学院大学専任講師 吉原 功殿
- B 上智大学講師 小島慶三殿
- C 東京工科大学院生 小林 博殿
- A 野村證券会長 瀬川美能留殿
- 終身会員 法政大学教授 安井 郁殿
- B イースタン観光社員 所司真理子殿
- C 上智大学教授 三輪公忠殿
- C 元日本総合研究所国際部長 金山宣夫殿
- C 上鶴間小学校教員 藤素美子殿
- A 日本工芸出版社社長 菅野兼吉殿
- C 中央大学教授 宮崎厚一殿
- B 東京工業大学助教授 松山正男殿
- C 青山学院大教授 坂井正広殿
- C 東京女子大教授 高村新一殿
- C 広島大学教育研究センター 助手 馬越 徹殿
- C 東京外国語大学助教授 河島英昭殿
- C 電気通信大教授 芳野越夫殿
- C 日本女子大学助教授 小島蓉子殿
- C 東京農工大学教授 金子六郎殿

C 青山学院大学専任講師 笹森 健殿

◆会費ありがとうございます
昭和49年12月~昭和50年3月 (敬称略)

- 関口 実、増田四郎、中富光国、田中忠治、池田真雄、慶伊富長、長坂舜二、笠原正成、藤平重雄、竹村 猛、村井孝子、古賀正則、佐藤 豪、野中虎雄、吉田光孝、飯田能子、石田孝夫、西巻正郎、茂木誠陸、茅伊登子、江藤 淳、西田亀久夫、手塚富雄、久武雅夫、伯東株式会社、大内英吾、岩下秀男、高野雄一、山田潤二、小穴 純、伊藤 修、清水 誠、湯浅光朝、友部 浩、久松潜一、木村敬美、池田 温、福原満寿雄、赤松秀雄、清水啓三郎、佐島秀夫、竹中 肇、阪田正三、笠井貴征、内藤 正、増田義男、中尾由矩子、杉山吉茂、岡本敏雄、末永国明、岡 惺治、竹内啓一、大地平三、江野沢一嘉、角尾 稔、伊藤文人、速水 清、宮川松男、山科高康、有山正孝、三井為友、浜川祥枝、小西正捷、平木典子、桑原哲郎、来住正三、福島杉夫、宮部 直、天野成光、三戸 公、友部 直、杉山 好、塚本利明、田村光三、岩本ミチ、佐々木彰、太田敬三、三井利夫、広瀬一彦、三浦永光、大原恭子、川本茂雄、升本喜兵衛、一番ヶ瀬康子、石田龍次郎、根岸愛子、上谷琢之、有賀喜左衛門、松原与三松、矢野 正、東川清一、園田義道、大川章哉、武田昌輔、北垣信行、山本 満、中尾信之、後藤聡一、岡田純一、林 喜男、長島 正、中山知雄、沢本孝久、田内幸一、谷口 修、大即英夫、関口 晃、松原元一、松元三郎、磯野 修、谷 資信、吉川春寿、岩尾裕純、増地昭男、鳥袋喜昌、山田圭一、光延明洋、大塩俊介、大橋方知江、深沢 実、村上 真、森山俊雄、武村次郎、若林貞雄、三宅義夫、上田明子、高山利勝、斎藤耕二、白井泰四郎、鈴木 博、中鉢正美、柳沢富雄、良知 力、伊藤 学、乾 崇夫、武藤義夫、高橋昭三、高橋源次、脇田良一、内山正照、石塚司農夫、新井 明、岩永達郎、大頭 仁、高橋正男、公文俊平、清水良三、小山弘志、茅野良男、加倉井茂樹、高木亀一、京極純一、富沢賢治、飯尾右一、飯田宗一郎、中野 卓、中川文雄、原 増司、蒲生栄治、高松正昭、小川洋輔、大羽 滋、川喜田愛郎、新沢雄一、梶 国男、河田喬夫、齋藤 勇、寺東寛治、近藤圭一、北野弘久、西川大二郎、吉原 功、渡辺忠胤、小林 博、藤永鉄雄、板橋並治、今井清一、松田正一、渡辺忠市、吉田公保、吉阪隆正、佐藤直子、小谷正雄、正田建次郎、南美枝子、岩佐凱夫、高階秀爾、吉田修三、稲毛卓御遺族、井原恵治、中岡二郎、力石誠之介、半谷高久、中島 力、平岡 勇、久保亮五、久世寛信、勢山秀子、山田昭房、堀米庸三、師岡孝次、田中悦子、一丸節夫、池井 優、子安宜邦、越智 昇、金子ハルオ、新保清子、佐藤頌子、中村孝之、小林 望、蓮見音彦、榎原繁雄、磯 直道、松島千代野、守永誠治、尾田幸雄、最上武雄、吉田 裕、近藤薫樹、浮田久子、久保内端郎、堀野定雄、荒川孝子、藤素美子、大島太郎、富塚文太郎、五唐 勝、萩原 稔、植村甲午郎、山田良之助、瀬川美能留、朝永振一郎、池田義人、大塚正夫、平沢 薫、武藤富男、松本武子、藤本 紘、田中久兵衛、人見 宏、瀬在良男、小泉 明、小島慶三、原 一雄、那須宗一、村松林太郎、富子勝久、加藤六美、岡村總吾、守屋美賀雄、向坊 隆、小山五郎、伊藤卓爾、太田末穂、丸山真男、石坂 巖、安藤英治、土居健郎、杉山逸男、島田治夫、栗原俊記、三上次男、立入広太郎、佐藤 毅、昌谷春海、増沢利幸、谷口汎邦、中村妙子、遠藤平治、村上泰治、西村閑也、永野 賢、大西 清、鈴木 昭、松尾 弘、一松 信、彦由一太、齋藤幸一郎、池上秋彦、飯泉 信、笠 耐、上保広吉、土井恵美子、高橋哲郎、菊地昌典、須藤秀治、遠藤卓夫、鶴川 馨、西 勝、木田 宏、手塚喬介、寺内礼治郎、浅野弥祐、山沢逸平、護 雅夫、春田素夫、福西 基、村上干賀子、高瀬文志郎、井村君江、高村新一、馬場伸也、三浦忠夫、本間 仁

第29回理事会・第18回評議員会

昭和50年3月7日・15時30分～18時・丸の内日本工業倶楽部

- ◎ 物価高と人件費増の影響を受ける法人経営の実情について
- ◎ 創立十年史『大学を開く』の出版と永井文部大臣の就任祝賀について
- ◎ 成城大学・千葉商科大学の会員校入会の承認と歓迎について
- ◎ 国鉄ストのためのキャンセルによる事業(宿泊)収入の減収について

① 昭和49年度収支見込決算

インフレ下の狂乱物価にほん弄された一年であった。重油、電気等の値上げによる支出増が約三六〇万円のところ、4月の新入生オリエンテーションが長期にわたる国鉄などのストですべてキャンセルになってしまった。大学関係のキャンセル総数は約二、〇〇〇人である。さらに悪いことに、インフレによる経費節約のため会社関係の研修会が、約三、〇〇〇人のキャンセルをされた。そのため約六〇〇万円の減収になってしまった。年額予算約九、〇〇〇万円の中で、結局約一、〇〇〇万円の赤字決算となった。創立以来初めての大きな赤字である。

② 昭和50年度の予算編成方針

職員のスエスアップを一〇%に見込むと、そのために四〇〇万円の待遇改善費増を計上しなければならぬ。さらに一〇年を経過した建物は補修を必要とし、暖房、

水道等の配管もまた修理の時期にきている。合計して約一、五〇〇万円の支出増となる。収入増加策として、利用料金の一〇%を協力金(一種のサービス付加料金)と

新たに二つの施設が加わる

大学院セミナー館新築なる

6月27日、開館を祝って
教師間交流セミナーを開く

鉄筋コンクリートの建物で、地上一階が二室に分かれ、六〇人用のセミナー室と一五人用のセミナー室を兼ねたサロンがある。この二室併せて面積は二二三・三平方

米だから、約七〇坪弱の小ホールであるが、構内最景勝の場所、構内西側の雑木林の丘に建っている。院生を対象としているが、研究者、学会などが利用されるとすばらしい成果をあげるに違いない。テーブル、椅子もやや上等品

して納めてもらうことにして、約一、〇〇〇万円の事業収入を図ることにする。その他文部省の補助金一〇〇万円増が決定したので、会員校二大学の会費収入増等を合計して約五〇〇万円の増収を見込むことにする。

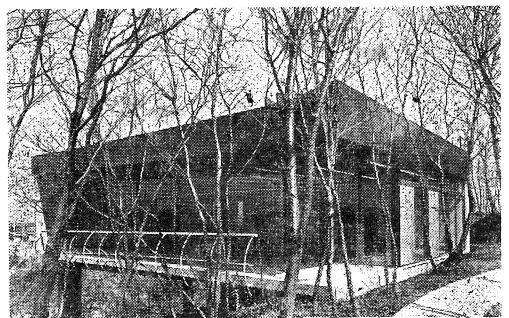
③ 協力を加算した場合の三食付き一泊の利用料金

〔ユニット宿舎を利用した場合〕

会員校の学生	二、〇三五円
非会員校の学生	二、二〇〇円
学会・教育団体	二、四七五円
会社・経済団体	二、八〇五円

であり、建築も上等であるばかりでなく、一般向きの設計である。学者用であることを十分考慮に入れ、勉強が終った後のサロンの活用方法も可能であるし、パントリとトイレもついていて、セルフ・サービスならば、なんでも飲めるであろうし、老人教授にもトイレルの心配がない。

学内の教授会、学部の研究会、小グループの学会の研究会、国際交流の学問的諸活動、学生指導セミナー、教員懇談会、大学院交流セミナーなど、教育と学問に関する学者グループのための建物としては他に類を見ない新企画である。早くも6月18～20日には東京女子



(上)大学院セミナー館、(下)遠来荘

大学白井常教授を中心とする心理学者の国際セミナーがここで行われる。アジア諸国の心理学者が十数名参加するはずである。また5月には核融合理論研究会が四七人の学者(広島大学西川恭治教授の責任で)を集めて五日間開催される。

多摩の民家・遠来荘移築なる

6月27日に一般公開
5月18日に内輪の茶会

昨年9月3日に地鎮祭を行い、移築工事にかかった小泉氏旧宅は本年3月末竣工した。室内の設備、調度品の準備、周囲の庭づくりなどに手間どっているが、その下検分に正田理事長と山内恭彦博士が4月7日に来訪された。兩人極めて満足され、しばし畳の部屋

で内祝いらしい接待を受けた。一階一三〇・六平方米、二階(屋根裏)八〇平方米の養蚕農家で、典型的な多摩の庶民の住居である(間取り、利用案内など詳しいことは10頁を参照)。

なお、この難しい復元工事は八王子市高尾町の有限会社田中木工(田中昌丈社長)の請負いである。屋根葺職人も木工大工も田中氏と一心同体になって、半ば文化財的建物を完成された。地元八王子にこのような特技を持っている人がいたことは幸せであった。

小泉勇二氏は誠に良いものを寄附して下さった。その仲介の労をとられたのは地元の市会議員石井栄治氏(元村長)であることも感謝して付け加える。

大学共同セミナー委員会

昭和50年3月17日私学会館で

学生参加費二泊三日で四、八〇〇円に決まる

昭和49年度終りの第三回委員会は次の一三名の出席を得て開催された。

- 木村尚三郎、宇野重昭、吉田夏彦、徳末安伊子、世良正利、今井淳、内田祥哉、淵倫彦、宮下啓三、武藤聰雄、大谷啓治、大東百合子、川島重成。

議事は、まず第74・75回共同セミナーの実施報告と、新年度計画のうち第76回までについて、それぞれの企画に当たっておられる運営委員から細部にわたる報告があり、つづいて今年秋の開館十周年記念セミナーを含む後半のセミナーについては、新年度の委員会が計画することなどが協議された。特に館長からは、5月に完成する大学院セミナー館の落成記念セミナーについての発案があり、また文部省の補助金によって運営される共同セミナーの収支の内容について説明が行われ、法人負担金をできるだけ軽減するために千人

ぜひお読み下さい

『大学を開く』頒布中
頒価＝一、五〇〇円(千共)
＝一、二〇〇円(手渡)

千人会にご入会の方には、記念に本書を贈呈いたします

会の援助を受けるようにすることを考える一方、学生の参加経費を若干値上げしたい旨の要請があった。現行の参加費は二泊三日で四、〇〇〇円であるが、これを値上げするとしても四、八〇〇円におさえたいという意見が多く、この金額を参加経費の基準と決定した。

寄付金報告

(昭和49年12月～50年2月)

ご支援を感謝して拝受いたしました。

- 一、五〇〇円 早稲田大学 川又昇殿
- 四、〇〇〇円 坂田正頭殿
- 一、七〇〇円 明治大学祖父江セミナー殿
- 三、〇〇〇円 中央大学近藤セミナー殿
- 一、五、〇〇〇円 中央大学近藤セミナー殿

第4回国際学生セミナー参加者殿
一、七六円 開館十周年記念募金箱
五、〇〇〇円 原 増司殿
二、〇〇〇円 第75回共同セミナー参加教授殿
八、〇〇〇円 国際学生セミナー 川田 侃殿

- 一六、〇〇〇円 国際学生セミナー 中根千枝殿
- 三、〇〇〇円 イースタン観光 所司真理子殿
- 一、七五〇円 山崎 典殿
- 五、〇〇〇円 植樹基金
- 二、七五〇円 第71回共同セミナー参加者殿
- 三、〇〇〇円 産業能率短大経営者二世コース殿
- 一五、七五〇円 第74回共同セミナー参加者殿
- 四、八〇〇円

第11回大学教員懇談会

主題—わが国の大学における国際交流の諸問題—教員・研究者の交流をめぐって—

- Ⅰ 文部省学術国際局審議官 笠木 三郎氏
- Ⅱ 日本学術振興会理事 岡野 澄氏
- Ⅲ 国際交流基金常務理事 犬丸 直氏

《シンポジウム》
国際基督教大学学務副学長 中川 秀恭氏
日本学術振興会人物交流課長 阿部 美哉氏
東京大学教授 永積 昭氏

《参加者》 46名
東工大(6)、東大、ICU、(各4)、電通大、農工大、東女大(各3)、埼玉大、中大、順天堂大、専修大、理科大、東経大(各2)、

- 《現物寄付》
ひな人形一揃
板橋区常盤台 鈴木武夫殿
福生市熊川 桑原利雄殿
府中市晴見町 岩根兵一殿
ひな人形・五月人形各一揃
八王子市市安町 岩崎敏雄殿
世田谷区梅丘 本木栄次殿
遠来荘用掛軸一本 山内恭彦殿
同 花瓶一個 上代たの殿
同獅子がしら(金沢名物) 永井道雄殿

期日—昭和50年1月18、19日

早大、上智大、津田塾大、聖心女大、東京家政学院大、東外大、東大(各1)、その他(4)(計19大学3機関)

今回は、前年度第9回懇談会で論議した大学における国際交流の諸問題を再び取り上げた。前回が留学生の問題であったので、教員・研究者の交流に焦点を当て、文部省から笠木三郎氏、日本学術振興会から岡野澄氏、国際交流基金から犬丸直氏を招き、それぞれ

体制に整いつつある状況を紹介されたが、文部省関係の予算措置をみても、派遣一、〇〇〇人に對し、受入れ五〇〇人というように依然出超型であり、出入りとも欧米先進国が主要な対象であるなど、まだまだ改善の余地は多い。

つづくシンポジウムでは、国際学会への援助、サブディカル制度(有給研究休暇)派遣職員法の運用、外国人受入れのためのゲストハウス、発展途上国との交流のあり方等々、多くの問題が提出されたが、国際交流といっても、実は大学間の格差や国内交流さえも不十分なわが国の大学のあり方が問われるべきであり、ひいては教員同士や日本人学生との交流において一体どれだけの努力をしているかなど、むしろ足元にこそ交流を阻害している要因があるのでないかという反省が促された。

最終日の全体会では、二日にわたった討論の成果を、項目別にとりまとめ、然るべきかたちで世論にアピールしてはどうかということが決議された。後日、世話人として全体会の司会をつとめられた東京農工大学教授川名明氏によってまとめられ、日本経済新聞教育欄(昭和50年2月10日付)に「大学教員の国際交流—大学教員懇談会から」と題して掲載された。なお、当懇談会記録が当ハウス企画室より発行されている(一部五〇〇円)。

第74回大学共同セミナー

主題——日本の近代化と文学

期日——昭和50年1月10～12日

△主題講演△

東京大学教授 三好 行雄氏

△セクション演習△

A 明治前期——樋口一葉『たけくらべ』を中心に
立教大学教授 前田 愛氏

B 明治後期——夏目漱石『門』を中心に
東京女子大教授 佐藤 勝氏

C 大正期——志賀直哉の諸短編を中心に
東京女子大教授 吉田 熙生氏

D 昭和前期——中野重治『村の家』を中心に
中央大学助教授 神谷 忠孝氏

E 戦後——三島由紀夫『金閣寺』を中心に
武蔵大学教授 鳥居 邦朗氏

F 近代日本の思想
東京外国語大学教授 宮川 透氏
武蔵大学教授 今井 淳氏

△参加学生△77名(内女子55名)
東女大(38)、武蔵大(24)、中大(11)、立大(4)、計4校。

◇ 数大学の、専攻を同じくするゼミが参加して行う合同ゼミは、すでに過去二回、日本の外交史の分野で八大学が参加して実験済みで

あるが、今回は武蔵、東京女子、中央、立教の四大学によって日本近代文学をテーマに開催された。

企画、運営に当たっては、共同セミナー委員の今井先生が、鳥居先生の協力を得て推進され、指導教授陣には共同セミナーの経験者である宮川、前田両先生もおられたので、別掲の鳥居先生の感想文に見られるように終始親密な雰囲気

に包まれたセミナーであった。各大学における日頃のゼミの蓄積の上に、大学院生の参加が多かったこともあり、かなり程度の高い内容の演習と活発な議論が行われた。ただ一大学の学生が大部分

◆四大学合同ゼミ

——日頃の成果を持ち寄って

武蔵大学教授 鳥居 邦朗
日本近代文学の研究はますます盛んになっているが、その一面で研究の細分化の傾向が現われていることは否めない。今回は特に近代日本人の精神史という視点を設定することで、各大学で行われているゼミを共通の広場においてみようとした。

全体の印象として目立ったのは次のような点である。まず参加生が四大学という限られた大学の、しかも日本文学関係の学生で

を占めたセクションにおいては、「共同セミナーというよりゼミ合宿のような感じであった」という反省の声も聞かれ、参加大学四校という限られた場合の合同ゼミは、一種の「なれ合い」に墮する恐れもないわけではなく、今後の

第75回大学共同セミナー

主題——生命について

期日——昭和50年2月13～15日

△全体講義△

生命について

東京医科歯科大学教授 竹下 敬次氏

「生命とは何か」とは何か
千葉大名誉教授 川喜田愛郎氏

△セクション演習△

A 遺伝学からみたヒトの多様性
東京医科歯科大学助教授

あったことが、拡散しない具体的な討議をする上で極めて有効であった。例えば一つの小説を論ずる際にも、その読み方の基本的作業の共通性があったため、学生相互の理解も深まりやすかった。また参加教授陣がおおむね専門を同じくする知己の間柄であったことは、学生の指導についても有利であり、運営をスムーズにする上で力があった。

今後いろいろな分野でこのような試みが行われることによって、セミナー・ハウスの機能を有効に生かしうる面も多いと思われる。

企画には一考されてもよい点であるように思われる。ともあれ、文学関係の初の合同ゼミとして、また当ハウスの新しい機能を発揮する活動分野として特筆できるセミナーといえよう。

△生命と物質

慶応義塾大教授 木原 弘二氏

B 生命現象と人類
立教大学教授 香原 志勢氏

C 疾病と生命
埼玉医科大教授 坂岸 良克氏

D 放射線医学からみた生命
東京医科歯科大学教授 鈴木 宗治氏

E (B、E両セクションにて指導)
科学史からみた生命の変遷
東京工業大教授 道家 達洋氏
哲学的アプローチによる生命論
東京工業大教授 吉田 夏彦氏

△参加学生△45名(内女子14名)
早大、慶大(各5)、日大(4)、津田塾大、東大、ICU(各3)、一橋大、東工大、日女大(各2)、東教大、東外大、東京医歯大、信州大、都立大、都留文科大、上智大、青学大、共立女大、学習院大、立大、武工大、

開催期日が学年末と重なったこともあって、参加者数は決して多くはなかったが、二五大学から実に多岐にわたる専攻分野の学生の参加をみることができた。文科学と理科学とがほぼ同じ割合で、後者には六名の医学部学生が含まれている。
なんといっても今回の特色は、患者を抱えておられる医師の先生方に多数ご協力いただいたことである。しかも全期間滞在されてご指導いただいたことは参加学生にとってもまことに得がたい幸せな機会であったというべきであろう。企画に当たられた吉田、鈴木、木原の三先生のご尽力によって、「生命」という大テーマに取り組むことができた。49年度の共同セミナーをしめくくるにふさわしいセミナーであった。



ようこそ広場にて

●業務通信 (I)

49年度の宿泊延人数は三九、五二七人で前年度に比べ五・三%減という極めて苦しい業務成績になった。マイナスの利用率となったのは、45年度の七・二%減以来、二度目のことである。その主な原因は、一つは春と秋に行われた交通機関のストライキで、予定されていた利用者九八五人の足が奪われた。また一昨年のオイルショックに始まる不況の波は企業研修に最も敏感に影響し、年末年始にかけて次々とキャンセルの連絡を受けてのことになった。これが1月、2月の利用者数が極めて低かったことにあらわれている。年間を通じて7月、11月、12月が前年度の宿泊延人数を上まわった以外は、二〇〇人から多い月で一、三〇〇人も的人员減をみるなど、社会の動きに大きく翻弄された一年であった。

しかし、会員校利用状況を見ると、東京都立大学が昨年と同数の利用回数で三年連続トップに立ち、宿泊延人数からみた最多利用は東京大学一、五一八人で、前年度の東京都立大学一、四三二人より九六人多くなっている。また表2に示すように、会員校、非会員校ともに利用回数は前年度を上まわっており、大学連合、学会・教

育団体の利用も前年度とほぼ同数であることは、社会人団体が二七回から九五回と大幅に減少したことと比べて、極めて対照的である。

【昭和49年度利用者調査表】

〔表1〕 会員校利用状況

順位	校名	利用回数	順位	校名	宿泊延人数
1	東京大学	60	1	東京大学	1,518
2	立大	47	2	立大	1,391
3	早稲田	41	3	早稲田	1,117
4	早稲田	35	4	早稲田	1,201
5	早稲田	34	5	早稲田	883
6	早稲田	33	6	早稲田	869
7	早稲田	24	7	早稲田	734
7	早稲田	24	7	早稲田	673
8	早稲田	21	8	早稲田	627
9	早稲田	20	9	早稲田	523
10	早稲田	19	10	早稲田	523

〔表3〕 月別利用状況

月	ゼミ回数(回)	宿泊延人数(人)	定員比(%)
4	59	3,225	45
5	65	4,255	57
6	45	2,843	44
7	86	4,465	60
8	70	4,128	55
9	89	3,279	53
10	94	3,043	41
11	69	3,974	55
12	101	3,019	45
1	48	1,427	23
2	98	2,719	40
3	85	3,150	42
計	909	39,527	47
月平均	76	3,294	47
1日平均	3	110	

〔表2〕 利用者別宿泊人員・ゼミ回数

区分	ゼミ回数	率(%)	宿泊延人数(人)	率(%)	1団体平均人数
会員校	582(560)	64	16,940(15,913)	43	19
非会員校	118(103)	13	6,358(5,451)	16	40
大学連合	29(33)	3	3,173(3,125)	8	55
学会・教育団体	85(86)	9	7,151(8,671)	18	39
社会人団体	95(127)	10	5,654(8,294)	14	28
個			251(282)	0.6	
計	909(909)		39,527(41,736)		36

()内は前年度数

▽会員校の利用率順調に進む
私立では早稲田、明治学院、慶応、法政、中央、日本、明治、学習院、上智、立教、青山学院、東京経済、東洋、成蹊、日本女子などの利用が特に目立っている。
国立では東京、東京学芸、一橋、東京工業、横浜国立、お茶の水女子の各大学がよく利用された。上位一〇校の利用状況は表1を参照されたい。

当ハウスを愛用されている教授は二、〇〇〇名を超えるが、39年度にしばしば利用された上位者を特記して、その教育愛に敬意を表したい。

- 10回 明治学院大 神保信一教授
- 6回 東京大学 大田 堯教授
- 5回 明治学院大 吉原 功教授
- 4回 学習院大学 児玉久雄教授
- 同 同 玉野井昌夫教授
- 同 東京大学 北垣信行教授
- 同 同 岡村甫助教授
- 3回 早稲田大学 川原栄峰教授
- 東京外語大 山本唯雄教授
- 東京工大 江藤 淳教授
- お茶の水女大 大克 誠教授

●寄贈図書

昭和49年10~12月

「国際交流」3 国際交流基金
「Introduction to Business」 奥 幸雄殿

「参画」1~4 参画協会殿

「足で体験する東南アジアセミナー報告書」2 早稲田奉仕園殿

「研究論叢」10~11 工学院大学図書館殿

「Asian Culture」8 エネスコ・アジア文化センター殿

「社会科学論叢」61 笠原正成殿

「岩波講座・世界歴史」31 岩波書店殿

「成瀬仁蔵著作集」1 日本女子大学殿

「吾レ竜門ニ在リ矣」小倉芳彦殿

「レオナルド・ダ・ヴィンチ考」 山岸 健殿

「都市構造論」 山岸 健殿

「平和のための革命」芝田進午殿

「百万人の保育教室」近藤薫樹殿

合宿の歌八首

安井 郁

秋近き緑のうへに立つセミナー・ハウスに雨は降りつぐ
日本の行く道もとめ若きらと合宿四日ころすがしも
世に出て子ども幾たりかセミナーの昔恋ほしみ姿見せたり
合宿を訪ひこし妻は若きらゆし離れて討論を聴く
うるはしき起伏の丘を愛でつつも老いたるかなや息切れのして
ひねもすの学習終りて帰る道さ夜しづまりて鈴虫の鳴く
教官室の窓をひらけば百鳥のこゑして丘の朝は明けゆく
降りつぎし雨のあがれるこのあした野狼峠にかぶ白雲

●業務通信 (II)

○利用料金の10%を
協力金としてお願いする

相次ぐ物価高騰は当ハウスの財政にも深刻な影響を及ぼしてきていますが、学生の負担をいたずらに大きくすることは私共の望むところではありませんし、節約に徹することでなんとか現状を切り抜けようという館長の意向で、新年度の利用料金の値上げは見合わせることにしました。

しかし、49年度は狂乱物価に襲われた上に、思わぬガケ崩れ修復工事の出費もあって赤字決算となり、当面の物価高に対処するにはなんとか手を打たねばならないのが現状です。このようなところから、協力金として、宿泊料、施設使用料(会員校を除く)、食事代の合計額の10%をこの4月から利用者の方々に負担していただくことにいたしました。皆様のご協力を切に仰ぐ次第です。

一九七五年の業務の暮あけは1月6日。東大鈴木博ゼミ、法政大霜島甲一ゼミ、神奈川大、駒沢大の各グループが今年初のお客様であった。丘の登り初めを祝って天気は快晴。7日の朝食は食堂から七草粥のサービス。和気あいあい

とした雰囲気はそのまま交歓会となり、職員の時吟披露に拍手。11日鏡開き。共同セミナー参加学生を含め在泊者二百余名におしるをごちそうする。15日は成人の日。例年在泊者の中で成人式を迎える学生にささやかなプレゼントをすることになっているが、今年はその準備をしていたフロントの職員はがっかり。

2月3日の節分には全員に豆を配る。豆まき用ならぬおやつ用として、おそらくは各人の腹の中にはいつてしまったことだろう。2月の利用者の特徴は、異色のグループが目立ったこと、一〇〇名に及ぶクリスチャンAVセンターは、いろいろな視聴覚用器具を持参して大々的な研修を行っていたし、日本自然保護協会は講堂いっぱいにも多くの資料を陳列し、熱心なゼミナールを展開。遠方は宮城教育大の井手先生、はるばる学生を引き連れて今年もなつかしいお顔を見せられた。

某新聞の投書欄にひな人形を譲って下さいと呼びかけたところ、実に五人の方々からの申し出を受け、善意の反響にいたく感激。ラウンジと食堂に寄贈していただいた人形をふんだんに飾り、学生達の日を楽しませることができた。

3月はゼミナールの総まとめの時期となるため、利用率はぐんと高くなる。1、2月は、前年度に比し宿泊延人数が非常に落ち込んで

だが、3月に前年度とほぼ同数の利用者を見ることができ、49年度をかるうじてしめくくることができた。

多摩の民家

「遠来荘」へどうぞ!

多目的利用法を考えて下さい

多摩地方独特の茅葺入母屋造りの民家の移築工事は3月末に終了し、職員の手によって庭作りが着々と進められている。

既報のとおり、総工費一、五〇〇万円(うち五〇〇万円は日本万国博覧会記念協会の補助)をかけて昨年9月より工事が行われていたもので、山内恭彦博士によって「遠来荘」と命名されている。

茅葺のあたたかな屋根の厚み、

古びた板戸の色、こぶしの花の梢から夕焼けをのぞむ景色は、都心から足を運ぶ人々に何かを語りかけるにちがいない。

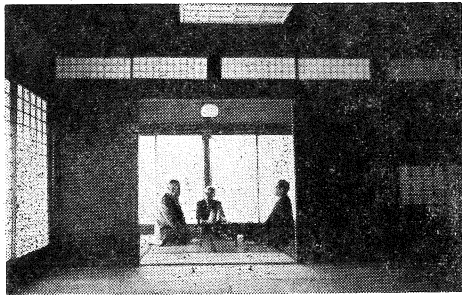
内部は、みそべや、でえど、こかつて呼ばれていた土間二間、板張りのひじろばた(四畳半)、いろいろの切られている板張り(八畳)、畳の間四間(五、一五、七、八畳)となっている。特に七畳と八畳の間は茶室として使用することができ、またいろいろではジャイナベヤ焼鳥などを楽しむこともできる。その他、詩吟、俳句などの趣味の会にその用途は限りなくあるだろう。

遠来荘は皆様のご利用をお待ちしています。利用料金は10~20時まで一万円(予定)です。

なお、調度品がまだまだ不足しています。和机、座ぶとん、碁盤、将棋盤、茶器、掛軸、鍋、ポット、やかん等々のご寄付を併せてお願い申し上げます。

早くも上代たの先生から青磁の花瓶、山内恭彦先生から漢詩の掛軸が届けられた。

七年前、碁を打つ部屋がほしいといわれた教授達には、またとない朗報に違いない。勉強の後で囲碁を楽しむのもよし、許可を得て酒席をつくることもあろう。セミナー区域から除かれた世俗的集いの場所である。

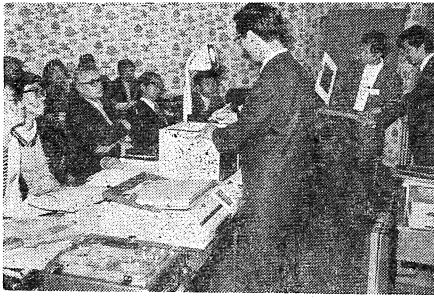


入口の土間からみた遠来荘の内部

●利用状況

※ 同月2回利用
※ 同月3回利用
※ 同月4回利用

◆1月	
東京大学助教授	鈴木 博
法政大学教授	霜島 甲一
日本大学教授	笠原 正成
東京大学助手	久保 謙一
武蔵大学講師	島 澄
立教大学教授	高橋 昭三
日本大学	*榛沢研究室
東京家政大学助教授	橋口 英俊
武蔵工業大学教授	西野 忠
東京大学助教授	岡村 甫
早稲田大学教授	村松林太郎
立教大学助教授	丹羽 克治
明治大学講師	祖父江孝男
早稲田大学講師	鈴木 二郎
東京都立大学助教授	小田中聡樹
法政大学助教授	麻生 宗由
東京都立大学助教授	稲垣 寛
武蔵工業大学助教授	桑原 哲郎
東京都立大学教授	大羽 滋
東京大学教授	諸井勝之助
慶応義塾大学講師	渡辺 彰
東京都立大学教授	伊藤 文人
日本大学数学学習会	
日本女子大学教授	上村 悦子
東京理科大学助手	日下 泰夫
東京大学助教授	木村尚三郎
法政大学講師	加藤 豊
東京都立大学教授	水沼 知一
中央大学教授	稲生典太郎
東京大学教授	北垣 信行



視聴覚器材を使って……

- 神奈川大学工学部会 田中 良正
- 駒沢大学 遠藤 祥雄
- 東洋大学短期大学 湯本 孝
- 茨城県立結城第一高等学校 若槻 泰雄
- 東京神学大学教職セミナー 磯見 辰典
- 玉川大学教授 山田 照代
- 清泉水子大学講師 彦由 一太
- 東京YWCA学院 山田 照代
- 玉川大学助教授 彦由 一太
- 第74回大学共同セミナー
- ボーイスカウト東京連盟西部地区
- 第11回大学教員懇談会
- 財団法人日本山岳協会
- 滝野川教会学校
- 日本化薬
- 小西六写真工業
- 日産ディーゼル工業
- 〔個人利用〕
- 一橋大学助教授 石 弘光
- 東京神学大学 宮内 修次
- 中央大学講師 村越 邦男
- 日本水産 高木 誠司

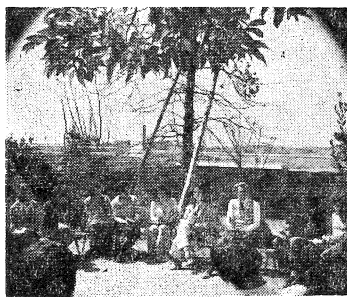
- 京都府企画管理部 井上 周一
- 東京理科大学助手 日下 泰夫

- ◆2月
- 上智大学助教授 本間 英世
- 国際基督教大学教授 原 一雄
- 慶応義塾大学助教授 山田 辰雄
- 明治学院大学教授 宮崎 道弘
- 都立大学助教授 鴫田 忠彦
- 東京外国語大学ベトナム古代史研 鈴木 皇
- 上智大学教授 野崎 喜嗣
- 武蔵工業大学講師 牧野 誠一
- 明治大学講師 羽田 三郎
- 青山学院大学教授 北垣 信行
- 東京大学教授 福田 一郎
- 東京女子大学教授 村越 邦男
- 中央大学講師 寺東 寛治
- 青山学院大学講師 小野田昌彦
- 中央大学 倉沢 進
- 東京都立大学助教授 大田 堯
- 東京大学教授 近藤 圭一
- 中央大学教授 西川大三郎
- 法政大学教授 小倉 充夫
- 津田塾大学講師 矢部 浩祥
- 中央大学助教授 神保 信一
- 明治学院大学教授 吉原 功
- 法政大学助教授 林 睦実
- 東京経済大学助教授 依田 精一
- 東京大学教授 関口 忠
- 法政大学助教授 若山 邦紘
- 東京都立大学助教授 井上 正晴
- 青山学院大学助教授 石川 信男
- 日本大学教授 北野 弘久
- 東京経済大学学生部長 高山 満
- 東京都立大学教授 清水 誠
- 青山学院大学教授 徳久 球雄

- 明治大学学生保健委員会 小田中聡樹
- 上智大学講師 金子ハルオ
- 東京都立大学教授 和田木松太郎
- 慶応義塾大学教授 崎本 康夫
- 日本大学樟沢研究生 高橋 徹
- 東京大学教授 高橋 徹
- 東京都立大学教授 城座 和夫
- 東京都立大学助教授 兼子 仁
- 慶応義塾大学教授 千種 義人
- 慶応義塾大学教授 生田 正輝
- 一橋大学教授 石田 忠
- 早稲田大学教授 新沢 雄一
- 中央大学教授 服部 正夫
- 東京大学助教授 岡村 甫
- 東京工業大学教授 道家 達将
- 東洋大学教授 志摩 陽伍
- 東京学芸大学助教授 高橋 勇悦
- 中央大学教授 高窪 利一
- 法政大学教授 安井 郁
- 明治学院大学講師 橋本 敏雄
- 東京大学助教授 公文 俊平
- 明治学院大学講師 丸山 稔
- 明治大学地理学演習 鶴見大学教授 井村 君江
- 拓殖大学第一高等学校 関 幸雄
- 芝浦工業大学教授 十代田知三
- 駒沢大学教授 阿部 肇一
- 城西大学教授 岩谷 元輝
- 和光大学学長 梅根 悟
- 東京都立工科短期大学助教授 岩井 邦昭
- 白百合女子大助教授 高橋やす子
- 立正大学助教授 高松 正昭
- 宮城教育大学教授 井手 則雄
- 和光大学教授 藤井 清
- 桜美林中学高校教職員組合
- 日本基督教会神学校講師

- 渡辺 信夫
- ◆3月
- 一橋大学教授 宮沢 健一
- 成蹊大学助教授 紋谷 暢男
- 東京教育大学教授 牛島 徳次
- 東京外語大学教授 竹内与之助
- 上智大学講師 Leif Byrne
- 東京都立大学助手 田中 平八
- 東京大学助手 石井 明
- 立教大学教授 小谷 達男
- 電気通信大学講師 狩野 紀昭
- 東京工業大学教授 松田 武彦
- 東京経済大学事務職員研究会
- 中央大学千代田法律ゼミ 有馬 朗人
- 東京大学助教授 中央大学刑法ゼミ
- 横濱国立大学助教授 小川 捷之
- 東京都立大学助教授 兼子 仁
- 早稲田大学教授 田村 恭
- 早稲田大学講師 J・M・リベラ
- 明治学院大学社会科学研究会 青柳 肇
- 横濱国立大学講師 示村悦二郎
- 早稲田大学教授
- 立教大学司法試験ゼミ 工藤 英明
- 横濱国立大学教授 角瀬 保雄
- 法政大学教授 国際基督教大学人形劇研究会 岸 則政
- 早稲田大学学生部長 関沢 正躬
- 東京学芸大学講師 吉原 功
- 明治学院大学講師 武者 利光
- 東京工業大学教授 岡村 甫
- 東京大学助教授 佐伯 彰一
- 立教大学教授 三戸 公
- 津田塾大学学生生活課長 寺出 澄子

日本大学教授	石山 伍夫	日本学生伝道会
成蹊大学講師	高木新太郎	文学教育研究者集団
学習院大学教授	児玉 久雄	すみれ幼稚園
東京立大学教授	唄 孝一	多摩三菱ふそう自動車販売*
東京大学助教授	森田 桐郎	東京都印刷工業組合三多摩支部
東京大学教授	大田 堯	日野自動車工業
東京大学教授	朽津 耕三	西武建材***
東京経済大学教授	向井 武文	立川高島屋労働組合
日本女子大学教授	徳末 愛子	東京芝浦電気
東京都立大学教授	大蔵 隆雄	アスター精機
明治学院大学教授	阪柳 豊秋	時潮社
お茶の水女子大学数学基礎研究	山本 進一	三多摩三洋住宅機器販売
明治大学教授	望月 清司	(個人利用)
専修大学教授	内田 義彦	東京大学学生
共立女子大学文化サークル	落合美智子	東京大学講師
専修大学教授	鳥越 信	時事通信社
東京経済大学講師	神保 信一	工学院大学教授
早稲田大学教授	平野健一郎	東京立大学学生
明治学院大学教授	中林賢二郎	慶応義塾大学講師
東京大学助教授	田中 陽児	日本福祉大学教授
法政大学教授	勢山 秀子	東京理科大学助手
東洋大学教授	中野 光	芝浦工業大学教授
玉川大学教授	堀野 定雄	日本水産
神奈川大学助教授	田村 院司	専修大学教授
杉野女子大学教授	土山 牧民	東京農工大学教授
玉川大学教授		大野 泰雄
拓殖大学文化部連合会		
芝浦工業大学教授	十代田知三	
立正大学教授	緑川 敬	
日本基督教長老教会調布南教会		
忍冬会(四大学合同研究会)		
立正女子大学短期大学部		
教授聖書研究会		
滝野川教会青年会		
東京学芸大学語学教育連合		
松本亨英語教育研究会		



野外セミナー風景

●館長日記から

3月7日の工業倶楽部は創立十一年史の総集篇でした。ことばや文字で表現するのではなく、実際の行為で表現した史実といってもよい。当夜の祝いの席に出ることを自己確認された方々ばかりのお客さんであった。ご出席の方々は、ご自分の経験した限りでの大学セミナー・ハウスのご縁を持っておられたので、共通の話題の中にとけ込んでおられた。すばらしい光景であった。◆上代、大浜、茅の三長老を始めとして、初代企画委員長手塚富雄、第一回共同セミナー運営委員長永井道雄の二先生、さらに共同セミナーの指導教授として第一回よりしばしば登場された長老山内恭彦先生が健在で、お顔を揃えられたことはいずれしい次第であった。◆「されどなお一つを欠く」というが、佐藤喜一郎氏のお姿が見えないのは、痛恨の至りで、親友田代茂樹氏がよくその代役を果たして下さったのは「持つべきものは、よき友である」との感を深くした。5月28日には佐藤氏の一周忌の集いがある。霊前に十年の成果をご報告し、多年の恩誼を感謝したい。

◆千人会の方々に手紙を書くことは私の生きがいになっている。大抵は早朝五時から七時までの間に書いています。千人会という献金の制度は日本でも珍しく貴重であるらしい。誕生日が献金日であることによって献金を送るといふ実際の行為が実現するのである。けだし「徳は知なり」という。◆本号では最高勲章を差上げたような気持ちで、長いことご支援下さっている長老会員を紙上で表敬しました。古稀を祝い、喜寿をよろこび、米寿を祝福したこともあって、人の世のえにしをしみじみ思うばかりである。◆近年若い年齢層の会員を迎えることができることは大変幸わせた。年長者の会員の後を継ぐ者として、大いに力を強くしている。二十代、三十代の方からA会員の申込みをうけて、私は一瞬驚くのである。心配したりうれしく思ったり感激している。そして次の瞬間、私もがんばるぞという勇気をふるい起こすのである。千人会の申込書は私にとって何よりも貴い精力剤であるらしい。◆時にはユーモアに富んだ間違いがある。もう八年前に千人会員になって下さった東大教養学部助教授山崎誠先生は、三千人の会の会費を同封しますといってお返ししてくれました。人はよくいうのである。千人会も早く会員が三千人位になるとよいですね。山崎先生の間違いは万人の願いを文字化したものであろう。そしていつの日か本会の三千人の会になることを予言されたものであろう。私はそのことを確かめるまで生きたいものである。◆5月は私にとって英国の月であった。テレビを通じてエリザベス女王の優雅な微笑に接したばかりでなく、英国の国民性と文化にふれることができた。日本女子大学のシエイクスピアドラママゼミの学生諸君が演ずる「お気に召すまま」を観劇したが、当ハウスでの練習風景を垣間見ていたので、その熱演は想像した通りであった。ステーション・マネジャーの奥田晶子さんや顧問の徳末愛子先生の努力をたたえたい。またBBC交響楽団のオーケストラを沢山の聴衆とともにきくことができたのも英国を思う気持ちで深める結果となった。簡素にして豪華なステージの演奏に本格的なオーケストラというものを味わった。絶好の機会であった。

◆しかし5月もたのしいことはかりでなかった。昨年と同様、国鉄ストで大迷惑をうけ、利用者のキャンセルによる損害をうけた。正しい職業観と労働者スピリットのない国鉄職員の無責任なエゴにも困ったものだ。戦後の民主主義は大切なものを欠いている。そのことを一日も早く気づかないと日本の社会は幸わせない。◆目の前の駅で闘争標語がかきつけられている汚ない車輛を見た。同じ日にその駅舎を清掃しているボーイ・スカウトの少年の姿がけげなげに、美しい光景を見せていた。

◆鮎川宗藤先生による表千家の茶席が遠来荘に設けられたことによって、5月の丘は一段と風雅になった。私も客を招じて新茶をい